

インターネット利用におけるリスク要因 —メディアリテラシー教育プログラムの開発—

Study for risk factors of Internet usage
- Development of Media literacy educational program -

市川 博¹, 松本 直樹², 中山 愛理³, 豊田 雄彦⁴, 竹内 美香⁵

¹大妻女子大学家政学部, ²大妻女子大学社会情報学部, ³大妻女子大学短期大学部,
⁴産業能率大学, ⁵実践女子大学

Hiroshi Ichikawa¹, Naoki Matsumoto², Manari Nakayama³, Yuhiko Toyoda⁴, and Mika Takeuchi⁵

¹Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

² Department of Social Information Studies, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-si, Tokyo, Japan 206-8540

³Junior College Division, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

⁴School of Business Administration, Jiyugaoka Sanno College

6-39-15 Todoroki, Setagaya-ku, Tokyo, Japan 158-8630

⁵Faculty of Humanities and Social Sciences, Jissen Women's University

1-1-49 Higashi, Shibuya-ku, Tokyo, Japan 150-8530

キーワード：インターネット, リスク, メディアリテラシー

Key words : Internet, Risk, Media literacy

抄録

今日のインターネットは、ツールの高機能化と利用者の拡大を背景として、参加する人に大きな利便性を提供している。その反面、この仮想空間には新しく大きなリスクも生じている。インターネットにおけるコミュニケーションのトラブルは、日本のほとんどの学生が体験している。日本の高等教育機関では情報リテラシー科目を設置して基本的なセキュリティの教育を行うなど、ネット上のリスクを軽減する取り組みを続けている。しかしトラブルの件数や内容を見る限り、十分な効果を上げているとは言いがたい。本研究では、大学生など、もっともネット上での多様なリスクに遭遇する危険性に直面する青年層に、より効果的なセキュリティ教育を提供するツールの開発に必要な基本的情報を探索する。中でも、ネット上のトラブルの心理社会的要因について重点的に検討する。本論では、日本の青年期女子が直面する今日的なインターネット利用上のトラブル経験の構造を調べるために実施した自己記入式の調査の結果を報告する。

1. はじめに

インターネットの社会的普及とそれに伴うソーシャル・ネットワーク・サービス（以下 SNS）の浸透は、多様な情報の受発信に誰でもが参加できるという意味で、マスメディア一極集中であった情報環境を一変させた。インターネット環境での利用者人口増は、誰でも情報の受発信に主体的に参加できるメリットを生んだ一方で、対面的な現

実社会におけるのと同様かそれ以上の社会的紛争事案の増加傾向を生み出すこととなった。インターネット環境での紛争事案は、他者の権利侵害や名誉毀損など対面的社会における事案と大差ないが「フレーミング（炎上）」や拡散など、伝達速度と情報の質・量面での被害の大きさ、終息処理の難しさにおいて、極めて特殊である。

しかし、我々の社会はインターネット環境を並

行的に包含した多元性を実現してしまっていて、これを停止・破棄することは非現実的な段階に至っている。ネット環境下での紛争は対面的な社会的場面に敷衍され、対面的な社会場面での「事件」はネット環境下で際限なく拡散し、拡大する。昨今、企業や公的機関が危惧する紛争では、ネットを軸とした「ステークホルダー（あるいは、そう称する人々）」による執拗な電話問い合わせ型の攻撃などが行われる例や、アクセスの集中による処理サーバの停止など、通常の業務に支障が及んだ例も枚挙に暇がない。情報環境の強化と豊富化には、市民生活の創造的な自由の獲得と自己決定可能性の保障、市民社会の成熟・発達という本来的なベネフィットが期待できる一方、従来の社会的紛争事案回避のための常識的配慮だけで追いつかない新規の課題が生じ続ける現状を生み出したという二面性がある。

現在、各教育課程で情報教育リテラシー教育が行われているが^{[1][2]}、上記のようなインターネット上の特殊な状況に対しては、新しい枠組みが求められている。本研究では、上記のようなインターネットリスクに対応したメディアリテラシー教育プログラムの開発を目的としている。インターネットリスク要因を探索するために、質問紙による調査を実施した結果を報告する。

2. 質問紙調査の概要

2.1. 方法

1) 被験者

東京都下の短期大学1校と大学2校の女子学生454人に対して質問紙による調査を行った。本報告では欠測値の無い406名を分析対象とした。

2) 実施時期

2014年7月に、実施会場である大学の講義室で、講義終了後に各人に各1回、任意の回答協力を求めて実施した。

2.2. 質問項目

質問項目は、竹内・鈴木が悪徳商法被害の対策教育のために開発した Risk Management Test(RMT)60項目版と^[3]、インターネットの利用状況と経験したインターネット上のトラブル経験、皮肉・比喩の例題的課題についての解釈の選択、インターネットで使用される特殊な用語の周知度 Internet Terminology を問う設問で構成した。本報

告では、以下を分析対象とした。

a) サイバー・コミュニケーション利用状況についての基本調査項目群: 接続機器, アクセスするSNSサイト

b) Risk Management test (RMT)

Maslow(1954)の「階層的欲求」理論に基づいて「生理的欲求」「安全性追求」「社会的所属欲求」「賞賛獲得欲求」「自己実現欲求」項目群と、Cloninger(1987)を参考として構成した「刺激追求・好奇欲求」(Cloninger,1987)の項目から成る危機管理教育用自己評価シートである。回答は「1 全然当てはまらない」から「5 非常にあてはまる」の5段階で自己評価する。

c) internet の利用に伴うトラブル経験(IT):

田代^[4]の先行研究の項目に準じて各事案の経験を問う。回答は「0 まったくない」から「4 非常によくある」5段階。

3. 結果および考察

3.1. インターネットの利用実態

インターネットサービスの利用では、LINEが367名(90.4%)で最も多く、Twitterが316名(77.8%)、Google+83名(20.4%)、Facebook70名(17.2%)と続き、その他を含めるとサービスを利用していない者はいなかった(図1)。

図2に、1週間あたりのインターネット利用時間を示す。バラツキは大きいですが、平均は25.4時間であり、1日にすると上記SNSなどの利用を含め2時間以上利用している。利用するデバイスはスマートフォンが309名(76.1%)と圧倒的に多い結果となった。

現在の情報リテラシー教育はパソコンを中心としているが、利用実態からは早急にスマートフォンに対応したリテラシー教育が求められる。

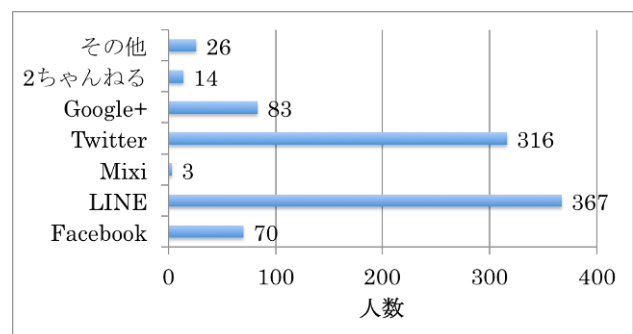


図1 利用しているインターネットサービス(n=406)

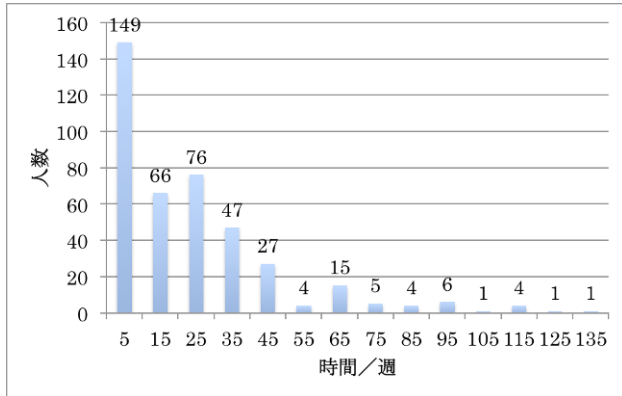


図2 インターネット利用時間 (n=406)

3.2. インターネットにおけるトラブル経験

インターネットを利用して何らかのトラブルの経験が「まったくない」と回答した者は有効回答数 406 名中 12 名 (2.96%) であった。インターネットを利用してほとんどの者がなんらかのトラブルを体験していた。

「ネットに書かれているデマを信じたことがある」「知らない人から誘いのメール・メッセージを受け取ったことがある」「読んで不愉快になるメール・メッセージを受け取ったことがある」という情報の受け手として不確実、危険、不愉快な情報に曝された体験が多い。ついで「ネットをする時間が多く、日常生活に支障がでていると思う」

というネット依存の状況を示す項目の経験率も高い。「自分の送ったメール・メッセージで相手を不愉快にしたことがある」という情報の送り手としてのトラブルも 46.6% の回答者が体験している。

3.3. Risk Management test (RMT) の因子分析

RMT は、詐欺や勧誘被害を誘発する個人特性に含まれる危険性を自己評価することで気づきを得させる教育プログラムに使用する目的で編成された質問紙である (Takeuchi & Suzuki, 2000)。回答者におけるイメージ構造を探索するために、60 項目の質問に対して主因子法による因子分析を行った。因子数の決定は 3 から 5 因子までの分析を行い、最適と判断された 3 因子についてバリマックス回転による因子分析を行った (図 4)。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった項目を除外し、30 項目に対してバリマックス回転による因子分析を行った。最終的な結果を表 1 に示す。

第一因子には「親、友人、他の人からほめられる」「他の人から感謝されるようなことがしたい」「他の人に自慢できるような友人や恋人が欲しい」など 12 項目が抽出された。第一因子は「(外的環境からの影響に準拠する) 黙従傾向」の因子であると考えられる (寄与率: 13.07%, Cronbach's $\alpha = .807$)。

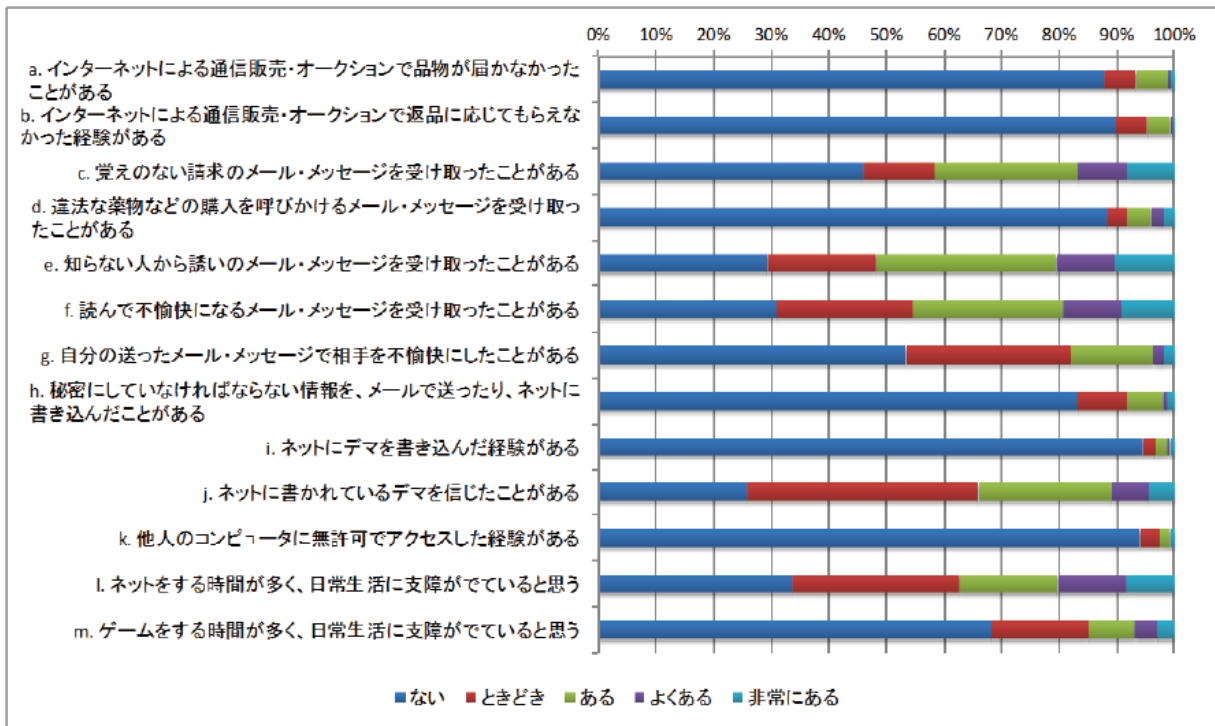


図3 インターネットトラブルの経験

第二因子は「特別な人間でありたい」「経験したことの無いようなことを試してみたい」「一般人、その他大衆にはなりたくない」など12項目が抽出され「刺激追求」と命名した（寄与率11.79%, Cronbach's α =.812）。

第三因子は「身体が苦しいことは避けて通りたい」「身体的にきつい仕事や課題は我慢できない方だ」など「身体的苦痛回避」の項目が抽出された（寄与率5.74%, Cronbach's α =.613）。

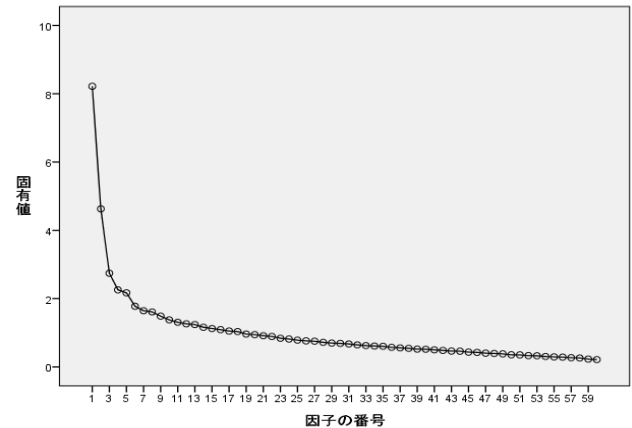


図4 因子のスクリー・プロット

表1 RMTの因子分析結果

質問項目	因子		
	1 黙従傾向	2 刺激追求	3 苦痛回避
Q52 親、友人、他の人からほめられたい	.654	.235	-.164
Q46 他の人から感謝されるようなことがしたい	.600	.173	-.171
Q28 他の人に自慢できるような友達や恋人が欲しい	.537	.155	.105
Q29 真理や完全な美に憧れていて、自分でも近づきたい	.512	.297	.155
Q44 「お守り」や「おまじない」を信じている	.511	.017	-.003
Q56 安全や縁起のためなら、ことわざや迷信でも気を使う	.477	.024	.060
Q53 他の人が喜ぶことは何でもしてあげたい	.472	.134	-.207
Q58 立派な服や物を身につけていると安心する	.468	.177	.168
Q27 他の人たちと同じような行動をとっている	.465	-.130	.235
Q59 正しい人間でありたい	.463	.007	.012
Q39 流行に敏感な服装や髪型や化粧をしている	.453	.094	.059
Q23 純粋な生き方に憧れている	.401	.142	.073
Q40 特別な人間でありたい	.382	.608	.039
Q30 経験したことがないようなことを試してみたい	.199	.582	-.109
Q34 一般人、その他大勢、大衆にはなりたくない	-.024	.555	.067
Q17 自分にしかできない独自の何かを完成させたい	.146	.549	.047
Q18 危ないことやスリルのある遊びが好きだ	-.098	.521	-.072
Q06 生活に刺激を求めている	.101	.517	.083
Q24 好奇心が強い方だ	.179	.465	-.198
Q41 向上心にあふれた人間だ	.312	.450	-.361
Q10 他の人から注目されることが好きだ	.175	.435	-.158
Q42 法律で罰せられないなら、試してみたいことがある	-.014	.425	.135
Q49 身体的な快楽を追及するタイプだ	.195	.420	-.217
Q36 新しい遊びや食べ物を他の人より先に試したい	.368	.411	-.054
Q13 身体が苦しいことは避けて通りたい	.059	-.071	.565
Q01 身体がきつい仕事や課題は我慢できない方だ	.131	.030	.562
Q07 気持ちに体力が伴わない	.107	.076	.493
Q19 持久力はあまりない	-.037	-.072	.452
負荷量平方和累積%	13.07	24.86	30.60
Cronbach α	.807	.812	.613

4. トラブル経験と因子の関係

因子分析より抽出された3つの因子とインターネット上でのトラブルとの関連を調べるために、因子得点を求め、インターネット利用に際してのトラブルの頻度との相関係数を求めた(表2)。相関係数は最大でも0.23程度であり、大きな相関は見当たらない。これはインターネットのトラブルの経験は内的要因のみで生じられるものではなく、外的要因や偶然も作用すると考えられるからである。

相関係数は小さいものの「ネットに書かれているデマを信じたことがある」というトラブルと第1因子「黙従傾向」には、無相関の帰無仮説に対して1%水準で有意であり、関連が認められる。同様に、第1因子「黙従傾向」と「ネットをする時間が多く、日常生活に支障が出ていると思う」も1%水準で有意であり関連が認められる。

第2因子「刺激追求」と「ネットをする時間が多く、日常生活に支障が出ていると思う」も1%水準で有意である。同様に「秘密にしていなければならない情報を、メールで送ったり、ネットに書き込んだことがある」は5%水準で有意であり、他3つのトラブル経験と5%水準で有意である。

第3因子「苦痛回避」と「自分で送ったメール・メッセージで相手を不愉快にしたことがある」をはじめ5つのトラブル経験が5%水準で有意であった。

5. おわりに

インターネットを利用しているほとんどの者がなんらかのトラブルを体験していた。また、利用する機器はスマートフォンが圧倒的(76.1%)に多く、メディアリテラシーを実施していくうえで、その対応が必要であると言える。

回答者の特性とインターネット上のトラブルの経験に一定の傾向があることが確認されたが、相関係数は最大でも0.23程度であり強い相関とは言えない。これは前述のように内的要因のみでネット上のトラブル経験を説明できないからである。ただ因子得点の小さなものはネット上のトラブルの確率は低いと考えられ、因子得点が増加するごとに、トラブルに遭遇する確率も高くなると考えられる。たとえば他者への従属欲求の強いもの(黙従傾向)はネットに書かれているデマを信じたり、ネットに依存したりする確率が高くなる。このことは常識的に考えても納得のいく因果関係であろう。

各人の特性に合わせた注意喚起を行う教育ツールを作成することで、効果的にセキュリティ、情報倫理教育を行うことができると考える。自分の内的要因の特徴を明確にすることで、リスクを明示的に理解すれば、トラブルに遭遇する確率も減少させることができるであろう。

表2 トラブル経験と因子得点の相関係数

トラブル経験	因子		
	1 黙従傾向	2 刺激追求	3 苦痛回避
a. インターネットによる通信販売・オークションで品物が届かなかったことがある	-.071	.085	.062
b. インターネットによる通信販売・オークションで返品に応じてもらえなかった経験がある	-.071	.113*	.038
c. 覚えのない請求のメール・メッセージを受け取ったことがある	-.003	.013	.108*
d. 違法な薬物などの購入を呼びかけるメール・メッセージを受け取ったことがある	-.023	.029	.011
e. 知らない人から誘いのメール・メッセージを受け取ったことがある	.025	.047	.116*
f. 読んで不愉快になるメール・メッセージを受け取ったことがある	.045	.104*	.119*
g. 自分の送ったメール・メッセージで相手を不愉快にしたことがある	.072	.031	.124*
h. 秘密にしていなければならない情報を、メールで送ったり、ネットに書き込んだことがある	.050	.123*	.069
i. ネットにデマを書き込んだ経験がある	.011	.072	.051
j. ネットに書かれているデマを信じたことがある	.228**	.096	.068
k. 他人のコンピュータに無許可でアクセスした経験がある	.059	.055	.083
l. ネットをする時間が多く、日常生活に支障がでていると思う	.193**	.201**	.106*
m. ゲームをする時間が多く、日常生活に支障がでていると思う	.006	.098*	.047

** . 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

* . 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(K2605)の助成を受けたものである。

引用文献

[1] 豊田雄彦 他, インターネット利用リスクを減少させる教育プログラム調査 — 技術・家庭科, 情報科, 大学情報リテラシー科目に関する調査 —, 自由が丘産能短期大学紀要, 第47号, p 1-12, 2014.

[2] 総務省総合通信基盤局 総務省情報通信政策研究所, 青少年のインターネット・リテラシー指標 — 指標開発と実態調査 —,

http://www.soumu.go.jp/main_content/000175589.pdf
(参照日 2015-8-30)

[3] 竹内 美香 他, 大学生のための悪徳商法対策教育用チェック・リスト: 適用のための基礎的研究, 産能短期大学紀要, No.33, p11-24, 2000.

[4] 田代光輝, インターネットトラブルの分類方法の提案, 情報社会学誌, Vol.6, No.1, pp101-114, 2011.

Abstract

The Internet today provides users with a great amount of convenience due to the improvement of tools and their functions, and the expansion in the numbers of users. However, with the expansion of both online content and time spent online, new and potential risks have emerged in this virtual space. A majority of Japanese students experience communication troubles over the Internet, and therefore higher education institutions have increased their efforts to reduce risks on the Internet by, for example, offering basic security education through information literacy programs. However, because of the number and variability of Internet risks, it is unlikely that these efforts have achieved satisfactory results. This study reports the results of a self-report questionnaire used to examine the problems or difficulties encountered on the Internet by young women in Japan.

(受付日: 2015年10月13日, 受理日: 2015年10月21日)

市川 博 (いちかわ ひろし)

現職: 大妻女子大学家政学部教授

東京理科大学理工学研究科修士課程終了, 中央大学総合政策研究科博士後期課程修了(博士(学術)). 専門は情報教育および人間工学で, 教育における情報活用(eラーニング)および, 人と情報のよりよい関係の構築を目指して研究を行っている.

主な著書:

Do Personal Attributes and An Understanding of Sarcasm and Metaphor Explain Problematic Experiences on the Internet? —A Survey for the Development of Information Literacy Education Tools—, *Transaction on Networks and Communications*, Vol.3, Issue 2, p159-177, 2015.

Design of Blended Learning with WBT in Higher Education, *Journal of Communication and Computer*, Vol.10, No.1, p97-103, 2013.